

中項目	小項目		自己評価			学校関係者評価		今後の学校改善に向けて
			小項目評定	中項目評定	現況	中項目評定	意見、提言等	
学び合い	1	支持的風土を育てる学級・学年集団づくりの実践	A	A	・ICT機器の活用が広がっており、今後も継続して子どもの学びをより深めるツールして活用していきたい。 ・複式学級に関する研修や情報共有を通して、次年度の編成課題を考え、工夫して指導している場面が見られた。 ・今後の複式学級に応じた、授業研究や研修会が必要。 ・ICT機器を有効に活用し、深い学びにつなげられるようにしていきたい。 ・副教科を学年部で取り組むことによって、教師の児童の学びがより深まった。体育では、ゲームができたり取り組む活動の幅が広がったりした。 ・ICT機器を活用し、子どもたちが主体的に学ぶ姿がよく見られた。 ・今後、複式化に向けて一人ひとりの児童が取り組むべき課題を把握し、友達の見聞を聞き、新たに考えを深めるサイクルができるようになればよい。 ・定期的な授業研究、研修会を実施されている。単級でも学年をこえた教員同士の学び合いをされている。	A	・複式化が子どもたちの学びにどう影響が出るか分かりませんが、プラスになるように、先生達も未経験な事なので大変かとは思いますが、頑張ってほしい。 ・運動場の整備作業を子ども達、保護者、地域住民が参加して行った。まちづくり協議会も広く住民の皆様へ呼びかけて、支援することができた。 ・ICT機器の活用により、子どもたちの学力向上が良い傾向にあり、学習効果につながっていると思います。 ・少人数であることを生かした実践に期待します。また、手段を問わず、他の学校とのかかわりを増やしていくことが、子どもの力になると思います。 ・少人数であり、縦割りに対して活動を深める工夫をされているが、同世代での刺激し合える活動をどのようにとらえていくのか。	・複式化に向けて、一人ひとりが課題に取り組めるように単元の計画を確認することや振り返りや次回の課題を把握する時間の確保をする。 ・複式学級での「学習の手引き」を来年一年かけて作成する。 ・ICTを活用し、他校と関わる時間をつくる。
	2	協同する体験・伝え合う喜び・コミュニケーション能力の育成を図る授業の工夫改善（ICTの活用含む）	A					
	3	主体的・対話的で深い学びを追求する授業研究や研修会	A					
道徳教育	4	生命を尊重する心やいじめを許さない態度などの道徳的実践力を育てる活動の実施	A	A	・命を大切にすること、いじめを許さないことについて、教員がその姿勢をもって、取り組むことができている。道徳科の授業と共に、学校教育活動全体を通して、道徳教育を大切にして学校教育に取り組むことができている。 ・9月の授業参観では、全学年で道徳の授業公開を行うことができた。また、授業参観を通して、本校の道徳教育の実態を伝えることができた。 ・週1時間を確保し、計画的に道徳科の授業が行うことができている。道徳科で学習したことを実生活に生かすために、実生活につなげて考え、ふりかえりをするように心がけることができた。 ・中学年で道徳科の研究授業を行い、道徳科においてよりよい指導ができるように研究を進めた。資料の開発、整備については不十分であるが、デジタル教科書を大型テレビに映したり、一人一人のタブレットを活用したり、子どもたちが深く考えられるように工夫をすることができた。	A	・命の尊さやいじめのことを道徳科として取り組むことは大切だが、そのことを自分たちの実生活へとつなげて考えふりかえることは、何よりも大切である。 ・校長先生の熱意で、昨年の6年生がやりたいことが「田んぼアート」として実行された。保育園児、幼稚園児、北大津高等養護学校生徒、成安造形大学生、仰木小学校児童が参加して共に田植えを行い、稲刈りも行われた。地域の子供も、学生のイベントとなり、素晴らしい交流ができて良かった。 ・子供のトラブルに対して細かく配慮し指導されている姿は目にしていて、先生方が一人ひとりの児童の言動に対応していることがうかがえた。 ・いつの時代でも、いじめ問題はあります。今テレビで動画が問題になっていますが、命の尊厳を授業で伝えてほしい。	・命を大切にすること、いじめを許さないことについては、その強い姿勢を教員が続き、児童にもその大切さが伝わるように引き続き取り組みを続けていきたい。 ・道徳科の授業だけでなく、学校教育全体を通して道徳教育を行えるように、これからも心がけを続けていきたい。 ・教科化されてから、教科書を使って週1時間の学習を続けることができているが、子どもたちがより深く考え、自分たちの生活に生かすことができるように、その要となる授業を進めていきたい。 ・来年度は、担任外も道徳科の授業を進めるなど、学校全体で授業の進め方について研究していきたい。
	5	道徳科の授業・評価に関する研究や資料の開発・整備・交流	B					
	6	保護者等への道徳科の授業公開	A					
体力づくり	7	たくましい心と体を育てる魅力ある授業の工夫改善	A	A	・学年合同の取り組みによって、教え合いや多人数での活動が可能になり、学びが豊かになったり、学習の幅が広がった。 ・アミーゴタイムの回数が今年度減り、前年度と比べて負担が減っているように感じた。 ・アミーゴタイムでは、運動が苦手な子も楽しみになる時間に、また、縦のつながりを意識した取組を行い、異学年同士の関わり合いや高学年リーダーの育成を図る場としたい。 ・なわとびカードや持久走カードを全校で統一したものを作成した。 ・大津スーパートライをアミーゴタイムに取り入れたことで、学校から2組受賞者が出た。 ・体づくりを推進するために、強制ではなく子ども達に選ばせたり、いつでも取り組める環境を作ったことで、休み時間も取り組む子たちがいた。 ・体育の学習が好きな児童が多く、学習の意欲が高いのは、体を動かす気持ちよさや楽しさを感じているからだと考える。 ・アミーゴタイムのあり方を昨年度と変えたことで、児童が自分の記録を振り返りながら次の目標を立てている姿が見られた。また、普段あまり関わらない他学年と活動することもあったのは良かった。	A	・継続的な取組が、子どもたちの力になっていくと思います。高学年が主体的に活動をすすめる姿が、下の学年のモデルになっていくと思います。 ・アミーゴタイムの活用で、他学年の子供もたちとの仲間意識が深まったことなど、内容も工夫されてよかったと思います。少人数の学校ゆえ、アミーゴタイムは重要だと思います。 ・児童クラブでもアミーゴタイムの話題を口にする子供が多く、他学年と交流しながらの体力づくりは、先生方の負担にならないよう継続してほしい。 ・少人数の本校としては、学年や学級の枠を外したアミーゴタイムでの縄跳びやマラソン等が良い活動となるので、より工夫が必要。	・アミーゴタイムは、教師の負担にならないような内容や回数を設定し、次年度も続けていきたい。 ・アミーゴの内容については、運動が苦手な子も楽しみになるものにしたたり、縦との繋がりを持てるようなものになるように今後も検討したい。また、自分の記録を振り返って成長を感じられるように、廊下に掲示を続けていきたい。
	8	体力づくりを推進する運動実践	A					
	9	体を動かす気持ちよさを体験させ、進んで体を動かそうとする意欲の育成	A					
指導改善	10	学力向上を目指した指導体制・指導方法の工夫改善	A	B	・校内研究のテーマに「仲間の良さを認めて自ら進んで学び考えを深める子ども～学びを愉しむ仰木っ子の育成～」を掲げて、子どもたち一人一人が「分かった」「授業が楽しい」「学校が楽しい」と思えるように教師が丸となって取り組めた。また、「自ら」を達成するために、教室掲示や授業ぐくりに工夫が見られた。 ・今年度は、県総合教育センターの先生をお招きし、授業改善や次年度の学習形態の在り方を教えていただいたりするなど、有意義な研修ができている。 ・行事の精選や教育課程を工夫することによって、学期初めと終わりのにゆとりが生まれ、働き方改革にもつながった。 ・複式学級に向けて行事や教育課程の見直しが必要である。 ・教職員数が減ることで、教職員一人ひとりの仕事の負担は増えている。不要な出張を減らし、分掌内容の精選が必要である。 ・ますます、行事や活動の検討・精選をしていきたい。職員減数により、ひとりの負担が増えることは必須になる。	B	・紙の宿題や課題もいいが、せっかくタブレットがあるなら、それを活用した宿題はできないものか。 ・複式学級になることでご苦労が多いと思います。ぜひ、子どもにとってメリットがある授業になっていけばと思います。 ・複式学級になることの保護者の不安に対して、また、実際のクラスの運営に対して、様々な取組が行われていると思われるが、少しずつでも解消できる授業を展開されるように願います。 ・先生の数の減少のため、個々の負担増加が予想される。IT機器の利用は大切である。 ・複式学級に向けての研究と工夫が今後ますます重要となってくる。少ない職員でいかに効率化を図るかが課題。	・滋賀県総合教育センターの指導主事を招いた研修で、具体的な助言をいただき、教員の授業力向上にとって大変有意義な機会となった。今後も研修や研究会を通して、教材研究の時間を確保しながら、教員一人ひとりの授業力向上を継続的に図っていく。 ・働き方改革の面では、教職員数の減少により、一人あたりの業務量が増加することが考えられる。学校行事や活動の在り方を見直し、限られた人数でも持続可能な学校運営ができるよう、不要な出張の削減や分掌内容の精選を進めていく必要がある。夏休みの課題はドリルの活用を継続していく。 ・少人数の良さを生かし、子どもが安心して自分の思いや考えを表現できる学習環境が整いつつある。専科教員や生活支援員を含めた教職員間の情報共有を行い、一貫性のある指導に取り組んでいく。 ・日々の学習の中でタブレットやデジタル教材を活用する姿が定着してきた。今後は、より効果的な活用方法を探りながら学習の質を高める。
	11	教職員の指導力、情報活用能力、及び組織的な教育力の向上	B					
	12	働き方改革の取組と教育活動の質の改善	B					

中項目	小項目		自己評価			学校関係者評価		今後の学校改善に向けて
			小項目評定	中項目評定	現況	中項目評定	意見、提言等	
家庭・地域との連携・協働	13	保護者の子育てに対して積極的な支援	B	A	・仰木ならではの体験活動を大切に、地域学習を行うことができている。今後も必要な体験活動は継続していきたい。 ・地域の方々のご支援で実施できている活動も多く感謝の思いを持っている。 ・今後の活動の在り方について一考していく時期に来ていると思う。	A	・仰木の里小との交流も少子化にとっては大切。中学校に上がると数倍の人数の中に入る経験にもつながると思う。 ・毎日HPを更新するなど、地域に向けての発信の努力を感じられました。 ・今年度は田んぼアートの取組により、幼稚園、保育園など、関係機関が一緒になって取り組めたことは良かったです。 ・児童たちのなかでは「あいさつ」が定着していますが、先生方の中には「スルー」されておられる方がいるように感じました。 ・仰木ならではの活動はぜひ大切にしていきたいと思います。他の地域等とも連携を深めていければと思います。 ・防災、防犯教育は、地域の方々との支援、協力も必要だと思います。	・仰木太鼓や仰木小唄、米づくり体験など、どの学年も地域に密着した学習を行うことができた。今後もさらに地域とのつながりを大切に、学校の強みとして発信していきたい。 ・幼小中の合同研修会や参観の機会を増やし、相互理解や校園間のスムーズな接続に努めたい。 ・学校ゆめづくりプロジェクトの田んぼアートは、地域の方や地域の幼稚園、大学を巻き込んだ取組で、大変ではあったが仰木小ならではのよい取組であった。 ・日々のHPの更新が、地域や保護者の安心・信頼につながっている。今後も可能な限り継続していきたい。 ・地滑りや防災倉庫の説明など、地域の方がゲストティーチャーとして授業を行ってくださることで、よりよい教育活動になっている。地域の方が学校を支えてくださっていることに感謝したい。 ・図書ボランティアの方の図書室の環境整備や読み聞かせが、子どもたちの読書への関心につながっている。引き続き連携して進めていきたい。 ・保護者が求めている支援について考え、学区内外の保護者同士の横のつながりができるような機会の設定について考えていきたい。 ・子どもの成長に関わって、保護者のニーズに沿った対応や支援ができるよう、より一層児童の見取りが必要である。 ・避難訓練では、専門的な方の指導を受け、より効果的な学習になるようにする。防犯教室も継続していく。
	14	保護者・地域との交流や情報発信、参観、懇談会、研修会の実施、地域人材の活用	A					
	15	防災・防犯教育の推進と、安心・安全な学校づくり	A					
保幼小中の連携	16	子どもの校種間交流や教員の出前授業	A	B	・今年度から、架け橋期カリキュラムの作成もスタートしたことから、仰木の里幼稚園、仰木の里小学校、仰木小学校がチームとなって、年長児童から、小学校への架け橋期プログラムを共に作成できたことがとても良かった。また、5・5交流、秋のおもちゃランドなど、幼稚園との交流も積極的にできた。 ・小学校間での交流も、年々盛んに行われている。今年度についても、3年の仰木の里小学校交流、4年のやまのこ学習、5年の夢プロジェクト学習、1、2年の仰木太鼓体験と、5、6年の国際理解教育等、交流はとてもさかんに行われている。田んぼアートで、いろいろな校種で参加できたことも良かった。 ・幼小中の接続期の教育課程を意識した連携、交流ができている。職員の人数も減り、複式学級に向けて、教育課程の見直しもしていかなければならない中なので、交流回数を増やすことは難しい。 ・今年度も上田上小とのやまのこ宿泊体験学習での交流を継続することができた。	A	・幼稚園との交流、学校間での交流、リモートでの交流など、様々な人と関わる機会は今後も特に必要になってくると思われます。 ・仰木の里東幼稚園や保育園児さんにも仰木小の魅力を発信してほしい。 ・幼小交流が、当日のイベントとして終わらず、互いの学びの場となるような内容になると、よりよい交流になると思います。少数者同士ならではの、顔が見える、名前が分かる交流をよろしくお願いします。	・架け橋期カリキュラムを仰木の里東小学校、仰木の里小学校、仰木小学校で作成し、「思いっきりいろんなことにチャレンジできる子ども」を期待する子ども像として掲げ、大切にしたい共通の視点を持って日々の取り組みができるように連携を進めることができた。幼児期で大切にされたものを小学校でも生かし、子どもたちの成長につなげられるよう、学校として意識して連携を進めていきたい。 ・幼小交流、小学校間、また、小中連携を計画的に進めることができている。来年度の学校体制を考えたときに、これまでと同じように交流が進められるかが課題となるが、現状通りの交流が進められると望ましい。
	17	校種間の授業公開や合同研修会	B					
	18	保幼小中の接続期の教育課程の編成等校種間のカリキュラム研究	B					
生徒指導	19	いじめや暴力行為、不登校等生徒指導上の諸課題の早期発見、日常的な予防指導	A	B	・毎週月曜日のいじめ対策委員会や毎月1回の生徒指導部会、また臨時のケース対策を定期的に行い、学年や子どもの様子について、教職員全員で共有することができていた。 ・小規模校の利点を活かし、全ての子どもたちを全教職員で見守るという組織体制を今後も続けていきたい。 ・これからも組織的な推進進めていきたい。意見が言いやすくて風通しの良い組織でありたい。	B	・児童のトラブルや保護者対応に、迅速に担任と情報共有ができよかった。今後も継続させてもらいたい。 ・小規模としての強みとともに、恐さもあると考えます。一人ひとりの言動や姿を見守り、今後も早期に対応していただけることを期待する。 ・少ない人数の中ですが、組織的な対応ができる体制を作ってほしいと思います。中学校も支援したいと考えています。 ・日ごろの観察がとても大切だと思います。また、それらを学校全体で共有していくことが子どもの安心につながっていくと思います。	・定期的ないじめ対策委員会や生徒指導部会を通じて情報の共有が行われ、全教職員で子どもを見守る体制ができている。今後も全職員での関わりや見守り体制を継続していきたい。 ・小規模校ならではの強みを活かし、学年を越えた教師間の連携をさらに深め、一人ひとりにきめ細かく対応できるようにしていきたい。また、教職員同士が意見を出しやすく、風通しの良い雰囲気を大切にし、課題や改善策を共有しながら進めていきたい。
	20	生徒指導・教育相談体制を確立と組織的な推進	B					
	21	家庭・地域・関係機関との連携による指導	B					
特別支援教育	22	個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成と活用	B	B	・通常学級と支援学級の枠にとらわれず、全ての子ども達をすべての職員で見守り共有することができている。 ・特別支援教育は「すべての子ども」を対象に行うものとの認識のもと、様々な特性を「個性」と捉え、その個性をできるだけ受け止め、受け入れられる学校づくりに努めている。各担任をはじめ、全教員が子どもたちの様々な特性を「個性」と捉え、「クラスの一員」「仲間の一人」と考えている。様々な個性を大人が認めて行く姿は、子どもにも良い影響を与え、認め合える集団づくり、支持的な風土づくりにつながっている。 ・個に応じた丁寧な対応を目指し、組織的、計画的に対応し、関係機関との連携を行っている。 ・本校の通常学級と支援学級は、大変良い関係である。 ・R6年度の学校関係者からの指摘は的を得たものであり、仰木小学校にとって大切なことである。これらの視点を踏まえて、上記項目について取り組むことができてきた。 ・個別の指導計画の運用について、保護者への丁寧な説明等をより一層心掛ける必要がある。	A	・スポーツデイでの特別支援学級の担任の先生と児童の信頼関係の深さに感動した。 ・全ての子どもたちが自己肯定感が高められる関わり、相手を認め合える仲間、集団であってほしいと思います。 一人ひとりを見守るには、少ない人数であることはプラスに働くと思います。人間関係を豊かにするために、様々な広がりができいくと良いと思います。 ・仰木小は、手厚い教育と小規模ならではの良い環境だと思います。特別支援学級については良い評価を耳にします。 ・子どもたち同士が各学級関係なく一緒に学校生活ができていると思う。お互いにいい関係が保てているので、引き続き頑張ってください。	・引き続き、原学級（交流学級）での、居場所が確実にあり、クラスの一員として過ごせるようになることを職員一同が認識の共有をしていく必要がある。 ・支援の必要な児童は、「学校の枠組みやありかた」を問うてくれる存在であるという認識に立ち、柔軟な考え方で環境を調整できるように心がけていく必要がある。 ・R6年度の学校関係者から指摘された内容について、引き続き教職員で認識を共有し、指導に生かしていくべきである。 ・個別の指導計画の取り扱いについて、再度その意義と必要性を再確認し、よりよい活用ができるよう研修を深めていく必要がある。
	23	組織的・計画的な特別支援教育体制の確立	B					
	24	関係機関と連携した相談体制の充実	A					